



▲ アジサイではありません サンタンカ (7月4日撮影・藤岡富士子家)



金光寺寺報
第217号
発行所 金光寺
宮崎県西臼杵郡
五ヶ瀬町大字鞍岡
5927番地
☎ 0982
83-2338

今月法語カレンダーのことば

浄土真宗のならいには 念仏往生ともうすなり

七月のことばは、『一念多念文意』の後半に出てきます。「おもひやうには申しあらはさねども、これにて、一念多念のあらそひあるまじきことは、おしはからせたまふべし。浄土真宗のならひには、念仏往生と申すなり。まったく一念往生・多念往生と申すことなし。これにてしらせたまふべし。南無阿弥陀仏」とあります。

親鸞聖人当時には、「一念往生」「多念往生」の論争がありました。一念多念とは一念義、あるいは多念義のことをいい、一念義とは、浄土往生は一声の念仏で決定するという考え方、一方、多念義とは一生涯、できるだけたくさんの念仏を称え、その功德によって浄土往生が決定するという考え方をいいます。このような一念多念といった「念の多少」を問題とする見方に対する反証的な文章として、

親鸞聖人のこの一文が語られているといっただよいでしょう。「一念往生」「多念往生」という言い方のほかにも、「十念往生」という言い方もありますが、ここで「一念往生」や「十念往生」ではなく「念仏往生」という言い方をされているのは、念仏の回数へのこだわりを無効化させたいという意図があったと考えられます。

親鸞聖人は、『無量寿経』の第十八願に「往相信心之願」「本願三心之願」という願名をつけられました。これは、念仏の問題を心の問題に移行させ、「信心」の問題と受け止められたからです。このことは、これらの念仏の多少の論争と決別し、距離を置くという意味もあったことが考えられます。

(本願寺出版社刊「大乘」誌掲載
『月々のことば』より抜粋 転載)

仏事お休みのお知らせ

下記の日は緊急を除き仏事は休みます。よろしくお願ひします。

- ◎ 8 月
21日(水) 終 日
23日(金) 終 日
◎ 9 月
23日(日) 終 日
◎ 10 月
6日(日) ~ 7日(月)
8日(火) 終 日
20日(日) 終 日

2019年6月、次の金光寺門信徒の方がご往生なさいました。謹んでお悔やみ申し上げます。

Table with 2 columns: Date and Name. 2019年6月2日 満95歳 原尾野 渡邊 フサ子様, 2019年6月3日 満91歳 荒谷 白 瀧 タツエ 様

ホームページ開いています。

URL https://konkouji.jp/

7月4日現在アクセス数 90,258人

私ルしけでら私▼のな雨草私成びみ省続己けのにいやで大日十えとがえで小でたてき一のみ自がで引に長てのしく中で自ないなな雨(日)が書早が先月号す人の日くる刻関る分らすきとのい雨な雨心な分つ雨雨け警(三)からきた降わ寺(居)をしなう早で禅存ま反とてめす雑ら横毎、気りなすばが(降)るのるる寺(住)し潤のいにくす問在た省頭はの。草境目日あづしっねいでかり以てとく報(不)た、な早けその知たて惱晴み草生を反すゆますり自のし明めのがいい二(善)い冷、く出んよら、いまれのにき見省よるす。、分でた日ま雨、のの頁(松)をなえギ梅るなうさ自るせた雨と生るでねこ。自いのす。にしが十で恵で(井)なとたう雨こ状なれ己とるらでつきとす。と天己や都が被かた先分すみ「(卓)す思ビギがと態雨ま中思嫌まが、▼降に候中な合▼害け。月田がの田(郎)うーう明がかとす心いなたが、は伸恵反り自だ心雨でいがて今三植ー雨植

仏教名言ノート

春は花、夏はととぎす 秋は月
日本人として初めてノーベル文学賞を受賞したのは、川端康成氏でした。一九六八年度の事です。
恒例により、ストックホルムのスウェーデン・アカデミーで、川端氏は文学賞受賞記念講演を行いました。講演の題は、「美しい日本の私―その序説」でした。
そのとき、冒頭に引用された歌がこの歌だったのです。
春は花 夏はととぎす 秋は月

冬雪さえて 涼しかりけり
道元禅師の歌です。我が国独特の春夏秋冬を端的に歌いあげた、情緒豊かな名句で、『傘松道詠』に収められています。
禅師は「本来の面目」と題して、この歌を詠みました。この歌には題がついていたのです。
世間では、面目ない・面目が立つ・面目躍如・真面目を發揮するなど、「面目」は人に合わせる顔、世間に対する名譽、様子、趣旨などの意味で使われていますが、仏教では「あるべき姿」のことをいいます。
だから「本来の面目」とは「本来あるべき姿」であり、それが「ありのままの姿」である、というところもな

まの姿」である、というところもな
川端氏は、この歌を引用しながら「月、雪、花」ということばが、日本においては森羅万象・人間感情を含めての美を表す基本的思想である」と、美の精神を強調して伝統的な日本精神の真髓を語り、東洋的な無の世界が西洋における虚無とはまったく異質なものであることを述べました。
川端氏は、美しい日本の持つ自然、伝統、芸術、宗教などを語り、聴衆に深い感銘を与えたのでした。
(本願寺出版社発行 辻本敬順著 「続・仏教名言ノート」から)

任職ひとりごと